

地下茎 びんめい

45号

地下茎舎
87.10.10
発行

この夏、次のような一文と出会った。

科学の方法は、前にも書いたように、多くの時間、労力、費用、技能を必要とするものだ。同時にそれは人間の歴史の長い積みかさねの産物だ。科学は技術から生まれた。「なんとかしてもっとよく、もっとたくさん、もっとらくに」の願望の歴史のなかから技術が生まれ、科学へ発展したのだ。

科学者の直接の祖先は、農民であり職人なのだ。技術の方法と科学の方法に本質的な区別はない。農民や職人の生産の方法には、科学の方法が含まれている。そうでなかったら、一般市民のための理科教育に、科学の方法なんて無用になるだろう。子どもがすべて科学者になるわけではないのだ。

いろいろな対象への、いろいろなレベルの方法の性格を考えてみよう

(『科学の方法』高橋金三郎編著 新生出版 P14より)

「まったく、そのとおり」と膝を打ち、「我が意をえたり」と思わせる文である。私たち「地下茎舎」では、「『常民の科学』を授業に」ということを力説してきた。それは、まさに『農民や職人の生産の方法には、科学の方法が含まれている。』と感ずるからなのである。

私たちは決して、「科学者」を育てるための教育をしているのではない。「生活者」を育てたいのである。学んだ「科学」を使って生活を豊にとらえ、自然にはたらきかける人間を育てたいのである。

だからこそ、今こそ、捨てやられ、切り捨てられようとする『農民や職人の生産の方法』のなかに『科学の方法』を見出し、学び、教育の場に復権させねばならない。

と声高に叫んでみても、今私たちは、その具体的なプランを持ち合わせるわけでもなければ、ささやかな実践があるわけでもない。

では、そんな私たちのすべきことは何か。それは、私たち自身が、その『生産』の場に出かけ、『科学の方法』なるものを学び盗みとってくるのである。もちろん、営々として人間の歴史のなかで築かれてきたものが、そう簡単に学び取れるものではないことは明らかである。

しかし、きっと「なんとうまくかんがえたものやな」と、そこにすばらしい『科学』を発見し、自然と人間のつきあい方を教えられることがあるはずである。地下茎舎の「野を行く」では、そんなことの連続でした。

理科教師たちよ、「実験室」だけにとじこもるな。

学びの場はいたる所にあり、「野を行こう。」

(楠田)

10月24日(土) 学習会

「しばさんびる」
2F「レインボー」
(女医館跡地)ウラ
2:30~

▶ Ⅳ期-第1回 『栽培植物と農耕の起源』(岩波新書、中屋佐助著)
(1.「栽培植物とは何か」)をしきり、新しい人の参加を……

11月14日(土) 例会

香寺中学校
オ1 理室
2:00~